鎭西上人の生活

前田聽瑞

一　大いに正宗を紹ぐ

わが宗祖法然上人の門下で、ずば抜けて光つてゐるのは何と云つても鎭西上人である。宗教的人格としての、あの趣豊かな結歸一行の生活が、世の多くの人々を轉だ相率化するところがあつたのに對して、その抱養する念佛思想が吉水の正統を紹ぐものでなくてはならないとして、淨土宗史上に於ける鎭西上人の意味と價値とを認めたものに、夙に安居院の聖覺法印、勢觀房源智上人などのあつたことは、人のよく知るところであらう。

建保二年正月、聖覺法印は大師上人（法然）の第三年の御忌に丁りて、御追善のために、眞如堂で七日間道俗のために往生の要樞、上人勸化の旨を演暢し廣說したが、「これもし我大師法然上人の仰せられぬことを申さば、當時の本尊御照罰し給候へ」と再三の誓言をしてのち、「もしなを不審あらん人は、鎭西の聖光房にたづねとはるべし」といはれたと傳へられてゐる。（勅修御傳・卷十七）聖覺法印は云ふまでもなく法然上人門下の俊英として化を當時に布いた一方の雄鎭であり、殊に上人から「聖覺法印わが心を知れり」とまで稱嘆せられた逸才であるが、その法印をして大呼一番「不審あらん人は鎭西の聖光房に尋ね問はるべし」と述懷せしめてゐるところに、鎭西上人が優長の學匠、正義傳持の法將として如何に門弟間に相當の幅を持つてをり、既に淨土正統第二祖としての大きな存在となつてゐた何よりの證據であ

るこ思ふ。

又上人（法然）常隨給仕の一高足、勢觀房源智上人は、「先師念佛の義道をたがへず申す人は、鎭西の聖光房なり」（勅修御傳・卷四十六）こ言つて、既に早くも鎭西上人の人格こ思想に滲む正義傳持の閃きを看破した。「予が門弟にをきては、鎭西の相傳をもて、我が義こすべし。さらに別流をたづぬべからず」こ言つたのも亦この勢觀房の附弟、蓮寂房である。なほこの外、二尊院の正信房なども、わが義の誤らぬ證誠には鎭西上人をひき合ひに出したこ言はれてゐる。

以上は同門同僚間に於ける鎭西上人の映像であるが、その恩師たる大師上人のそれには、より深い意義があるこ稱してよい。「汝は法器なり」（勅修御傳・卷四十六）こいふ大師上人の一言ほど簡明、しかも遺憾なく鎭西上人の全幅を傳へた言葉はないであらう。洵に聖光房鎭西上人は一宗優長の學匠、正義傳持の法器であつた。身に選擇の傳を膺した法然上人第一の神足、末代念佛の龜鑑、九品の棟梁、これが鎭西上人の姿であつた。上人滅後五百九十年、畏くも 仁孝天皇は勅して「大紹正宗國師」の諡號を賜つたこいふことは、正に上人紹隆の德光千古の輝けるもの、茲に吾曹は奉謝の念自ら禁ずる能はざるものがある。

さて、この大紹正宗國師、鎭西上人は如何にして、その深い宗教的理念を捕へることが出來たであらうか。それを殘る所なく描出することは、到底僅少な紙數のよくする所ではない上、餘りに研究的になつて興味の少い部分も多からうから、こゝではたゞ特異な二三の點を擧げるに止めて置かう。

二　聖道淨土兼學の人之を知るべし

二祖鎭西上人が三十有餘歲年下の然阿良忠上人こ堅い師弟の契約を結ばれた頃、卽ち二祖が既に七十五歲こいふ老境

に達してゐられた時分、二祖はこゝに傳法の適器を得て、意氣更に新たに、法燈護持の至誠に燃え、精力彌々集中して廣度衆生のために念佛の奥義を後賢に留め贈つた畢世の大著が例の『徹選擇本願念佛集』である。その中で上人はかう書いてゐられる。

「沙門某甲昔聖道門を學せしの時、聊か彼の淨佛國土成就衆生の義を習ひ傳へ、今淨土門に入ての後に、又此の選擇本願念佛往生の義を相承す。二師の相傳を以て聖教の諸文を見るに其の義更に教文に違はず。單の聖道門の人、單の淨土門の人は之を知るべからず。聖道淨土兼學の人之を知るべし。自ら此の意を得て一切の大乘經を披き、一切の大乘論を見るに隨喜の涙禁じ難し。此則ち聖教の源底なり。法門の奥藏なり。佛菩薩の秘術なり。」

こ。これは正しく上人の自叙傳であるこ稱してよい。上人の立場は何こ云つても「偏依法然」である。かの「わが大師釋尊はたゞ法然上人なり」こいふのが鎭西上人の大信念である。鎭西上人こしては飽くまでも法然上人が本であり、法然上人が眼目であり、法然上人が依處である。實に鎭西上人は如何なる場合にも選擇本願念佛の大義を祖述し顯彰し、以て宗風萬代に墜ちざる底の方便を具足し修滿するために謙苦精進せられた。有名な『末代念佛授手印』の序に於ては了々分明に大紹正宗こしての上人それ自體が浮彫されてゐる。上人の生活は正に正義傳持、宗風紹隆のためのそれで、聖經に所謂「專ら法を樂求して心に厭足なし。常に廣說を欲して志疲倦なし」この金言は、蓋し上人のために作られたる乎を思はしむるものがある程である。

しかし乍ら、それにも拘らず「單の聖道門の人、單の淨土門の人は之を知るべからず。聖道淨土兼學の人之を知るべし」こ言つて、特に聖淨二門兼學のここを力說してゐられる所以は、實を云へば「わが大師釋尊はたゞ法然上人なり」こいふ鎭西上人獨自の體驗から流露するもので、更にあけすけに云へば一方に於ては先師上人の廣學博覽の智德を顯さ

んが爲めであるこ同時に、他方には濁世末代の小智愚鈍の迷惑を救はんこする高明なる意圖からであらう。卽ち鎭西上人の胸底には先師上人の選擇本願念佛こそ實に聖敎の源底であり、法門の奧藏であるこいふ深い自證こ、特にこの點、この理趣を通徹し開闡せんこする堅正不卻の或る積極力が不斷に働いてゐたからであらう。實にかの高祖善導大師が「若し解を學ばんこ欲せば凡より聖に至り、乃至佛果まで一切無礙に皆學するここを得よ。」(觀經散善義)こ勸誡せられ、宗祖法然上人が「凡そ淨土の學人は亦應に大藏經を學すべし。(中略)矧んや又解說の法師をや」(漢語燈錄第八)こ訓諭されてゐるやうに、凡そ「本願念佛」、「選擇本願念佛」の雄大なる御提唱は謂ゆる「底を窮めてその妙實を得」られたもので、聖淨二門兼學、法門無盡誓願知の遠景があつての選擇本願念佛であるこ云ふ眞實の際を分別し顯示するための「聖道淨土兼學の人之を知るべし」であるここは吳々も忘れてはならない點である。

窮老の微賤、圖らざるに存命し、念佛の暇に當り、行法の隙を瞻て、一切經藏を披き、優婆提舍を覽るに、選擇の正文經敎の說に相應し、念佛の妙義論家の釋に違ふここなし。計り知りぬ。上人博覽の智、得て稱すべからざるものなり。(徹選擇集・卷上)

こは、鎭西上人自らの述懷である。蓋し智慧聖明、深法門を顯示し、正義傳持、大紹正宗を以て自らの本分こ任ずる上人が聖淨二門兼學の學風に據られたのも、決して偶然ではないのである。洵に天成不思議のなす所、智德の廣大、後人をして渴仰止まざらしむるものである。

三　精神百倍せる晩年

末路晩年は君子更に宜しく精神百倍すべし

こは有名なる『菜根譚』の言葉である。上人が晩年十ヶ年間は渾身をたゞ正義の傳持、大道の顯示のために捧げられたのである。勿論かゝる生活は内に燃ゆる願往生心、佛恩報謝、念佛報國の至誠の支へなくしては出來るこゝではないが他面亦そこに内外の情勢が預つて力のあるこゝを否むこゝが出來ない。

思ふに、上人が正法傳持の聖心を刺激し躍進せしめたものは主として同門同行間に於ける異義諍論であつたように見える。

然れども上人（法然）往生の後、其義を水火に諍ひ其論を蘭菊に致す。還つて念佛の行を失し、空しく淨土の業を廢す。悲い哉、悲い哉、いかゞせん、いかゞせん。爰に貧道齡已に七旬に及び、餘命又幾ばくならず、惱まず愁へずして空しく止むべからず。之に依つて肥州白河川の邊、往生院の内に於て、二十有餘の衆徒を結び、四十八の日夜を限つて、別時の淨業を修し、如法の念佛を勤む。此間に於て徒らに稱名の行を失はんこゝを惱み、空しく正行の勤を廢せんこゝを悲み、且つは然師報恩の爲め、且つは念佛興隆の爲め、弟子が昔の聞に任せ、沙門が相傳に依つて之を錄して留めて向後に贈る。（末代念佛授手印序）

『授手印』撰述の動因が同門同行間に於ける宗義上の諍論紛糾にあつたこゝは至極明瞭である。（これに關する具體的な話は『東宗要』第四・『決答授手印疑問鈔』卷上なゞに載せられてゐるけれども、今は一切省略するこゝゝする。）

尙『授手印』裏書に於てかの一念義（幸西）弘願義（證空）寂光淨土義（行空）の三義をば邪義として排擊せるが如き更に『念佛名義集』・『念佛三心要集』・『淨土宗名目問答』に於ても亦同門下の異義並に邪義に對して論難攻擊の鋭鋒が向けられてゐるに徵しても、當時宗祖門下の情勢はいはゞ是非紛然、内憂内患の非常時であつたこ見てよいであらう。これ等の憂患こ同時に、外には又專修念佛に對する謗難がある。例へば菩提心を無視するは大乘の法門ではないこして

謗難する『摧邪輪』一派の如き、大日房の謂ゆる「念佛者但南無阿彌陀佛ト勸ルナルゾヲカシキ事也。稱名ハ拍子也、舞ハン折リノ拍子也」（徹選擇鈔・上）この謗難の如きは、その最もよき證左であらう。吾人はこゝで煩はしくそれ等の例を引用せぬが、貞慶解脫上人の如きは「念佛は淺近で取るに足らぬ」（興福寺奏狀）ときめつけてゐるし、榮西禪師の如きも「禪を離れた口稱念佛は往生の業とはならぬ」（興禪護國論・卷下）と言つた位で、いはゞわが鎭西上人は一面外難外患の眞つ只中に痛居せられたと言つてもよいと想像される。

但し、內憂外患痛と共に居した鎭西上人の晩年も、天興か偶然か、傳法の適器然阿良忠上人を得て、欣悅一番、精神更に百倍して、師資共に志勇精進、心退弱せず傳法傳戒、進んで淨土宗要八十題の口訣を傳受せられたるが如き、蓋しわが鎭西上人の胸奧、熙怡快樂言ふにたふべからざるものがあつたらうと思はれる。洵に淨土宗要八十題は遠く宗祖法然上人の口傳より成れるもの、殊に良曉上人が「此の鈔物は當流秘藏の書なり。（中略）たとひ一門たりとも他見に及ぶべからざる者なり」（淨土宗要・末尾）と記してゐるやうに、吉水正流秘藏の傳書である。かく傳々相承の法義、祖々已證の奧旨傳へて遺すことなく、殊に「我法は然阿に授け畢りぬ。法燈何ぞ銷ん。然阿は是れ予が盛年に還れるなり。遺弟此人に對して不審を決すべし。」（選擇傳弘決疑鈔・卷五）といふ印可決定の表現は、正にその昔鎭西上人が吉水の禪房に於て「汝は法器なり」と稱歎せられしと同斷、眞に淨土宗史上比類稀な記錄であつて、一宗末代の元祖はかゝつて茲に存すると云つてよいのである。

思ふに、正法傳持の大任を荷負してゐた鎭西上人は內憂外患の間に處して、毫も屈する所なく、益々破邪顯正の熾烈を加へ、その晩年は精神更に百倍して、精力自然に發應して無盡不磨の寶藏を開き、祖述憲章の義燈高く光を放つて、正宗今に至つて墜ちざるは、一に上人の信力法力に負ふものなることを特に銘記せねばならぬ。

四　念　死　念　佛

八萬の法門は死の一字を說く。然れば則ち死を忘れざれば、八萬の法門を自然に心得たるものにあるなり。（一言芳談）

また安心起行の要は、念死念佛にありて、つねのことわざには、いづる息、いる息をまたず、入る息、出る息をまたず、たすけたまへ阿彌陀ほとけとぞ申されける。（勅修御傳・卷四十六）

これ等の文句は鎭西上人常の御述懷で、いはゞ上人の魂であり、生活であり、宗教であり、そして哲學でもある。別な言葉で云へば上人一代の御發見、一代の獨創こそ念死念佛である。

蓋し、「八萬の法門は死の一字を說く」といふ上人の透徹せる慧觀は、一日舍弟三明房の卒倒を目擊されたといふ特殊的經驗に據るとする論者もあるが、私を以て之を見れば單に個人の特殊的經驗よりは寧ろ人生を全體として死、無常、暫有と痛感することによつて念死念佛といふ雄大なる鐵案が產まれたものだと思はれる。「人の命は雨の晴間を待つものかは」。諸行は無常である。諸法は無我である。一切は衆緣所生の姿である。一切の法は猶し夢と幻と響との如しと覺了することは卽ち法を見、眞を見ることであり、人生を全體として見ての價値である。この意味に於て念死それ自體に哲學的根據があると言つてよい。私が先きに念死は上人の哲學であると云つた所以は卽ちこゝにある。ところで、死を念ずること（念死）は阿彌陀ほとけへの志向（念佛）を增長する。死を念ずる心は光壽無量の大生命を思慕する心である。

換言すれば念死卽ち無常性を知見し內面化することは一つの智慧であり、正見の樹立である。正見の樹立は正行の進轉となる。安心起行の要は念死念佛にある。これは實に驚くべき世界である。しかも、それがわが鎭西上人の生活であ

る。念死念佛――この立場は上人の生活に於てそのまゝ支持されてゐる。即ち上人自ら「爰を以て弟子行ずるところは彌陀の寶號晝夜廢することなく、願ずるところは安養の淨刹寤寐にも忘れず。」(識知淨土論)と言へるが如き、況して「長時の御勤めは、生年三十六の夏より七十七の春に至るまで、一分も時尅を違へず、六時の禮讃と六卷の阿彌陀經とを御勤め候へき」(決答授手印疑問鈔・卷下)と記してゐる三祖の見聞實錄の如きは、その最もよき證左であらう。

五　一　字　三　禮

又年齡六十九、寛喜二年七月廿八日、一字三禮、燒香散花、如法如說、書阿彌陀經一卷、擬臨終之持經焉。(聖光上人傳)

一刀三禮の藝術、一字三禮の寫經には法欲に燃ゆる勤精進の佛事を直感することが出來る。願往生者にとつては精進一心は是れ道場である。

一向專修の行者にとつては一字三禮の阿彌陀經は是れ道場である。一字三禮は齋戒沐浴する心である。ニィチェの語を藉れば「高みへの情思」(リフテルンハイト・ナハ・ニーエ)である。鎭西上人に取つては阿彌陀經は念佛往生の券契である。(決答鈔・卷下)上人の淨寫し給ひし三禮一字は單なる文字でなくて上人それ自身である。上人は三禮一字を一度の往生にあてがひて淨寫されたもので、それはそのまゝ精進波羅密であり、六波羅密であり、念佛三昧である。蓋し一字三禮の阿彌陀經はこれを形式的に見れば恭敬修に外ならぬけれども、內容的には『阿彌陀經』の精神を實行し、體驗し、內面化せる無餘修であり、無間修であり、長時修でもあることは飽くまでも見逃してはならない點である。鎭西上人の行規の特色は飽くまでも口稱の一行三昧に結歸するところにあるので、この點は『末代念佛授手印』の奧圖を一瞥すれば甚だ明了なるものがある。即ちそこには、宗祖法然上人の言葉を引いて、三心も南無阿彌陀佛、五念も南無阿彌陀佛、四修も南無阿彌陀佛、三種

行儀も南無阿彌陀佛と書かれて、口稱念佛の一行を以て、六重二十二件の總體の歸結とされてゐる。かくて吾々は鎭西上人の生活の中心が南無阿彌陀佛であることが領解せられる。上人は恩師法然上人を「生き如來」と仰ぎ、大師釋尊と仰ぎ奉つて、その師の內面的發展を精細に跡付け、その通られた道を自分も內面的に通徹せんと謙苦せられたのである。この意味に於てかの一字三禮の寫經生活も所詮は常に「師」に照らして自己を完成せんとする方便であつたのである。

『勅修御傳』(卷四十六)には

嘉禎四年二月廿九日未尅(ひつじのこく)、七條の袈裟を着し、頭北面西にして、五色のはたをひかへ、平生の發願にまかせて、一字三禮の自筆の阿彌陀經を、合掌の母指にさしはさみて、念佛すること一時ばかり、最後にはことに高聲にとなへて光明遍照とて、いまだつぎの句にいたらざるに、ねぶるがごとくして寂に歸す。

と記るされてある。良に末代念佛の龜鑑、おろかならぬ御事である。

六　曉の宴座——念佛報國

人ごとに閑居の所をば、高野粉河と申あへども、我身には、あかつきのねざめのここにしかず。(勅修御傳・卷四十六—上人つねの御述懷)

惟ふに聖經に所謂「一乘を究竟して彼岸に至る」といふことは決して容易の業ではない。「淨土宗の一乘は一向專修の南無阿彌陀佛の一乘である。」(西宗要・卷二)この南無阿彌陀佛の一乘を究竟することは亦無難ではない。こゝに上人の謂ゆるあかつきのねざめのここの祈りがあつたことゝ思はれる。曉の寢ざめの宴坐は正に正見正思惟の勝境である。

畏くも　明治天皇の御製

曉のねざめしづかにおもふかな

わがまつりごといかゞあらむと

の大御心を拜し奉ることは洵に恐懼の至りである。又弘法大師の有名な「後夜聞二佛法僧鳥一」の詩にも

閑林獨坐草堂曉　三寶之聲聞二一鳥

一鳥有レ聲聲有レ心　聲心雲水俱了了

とあるが、これ卽ち曉旦の靜寂が禪思正觀にふさはしいからであると云へる。わが鎭西上人も亦曉のねざめの靜寂に於て自省自戒、三業淸淨のいのりを忘れ給はず、晨朝のひかりの窓に不離佛・値遇佛の義を禪思し給ふた。上人は春しづかなる曉星(あかほし)のあした、あかつき寒き冬の獨房に瞑目端坐、たゞ甚深の念佛三昧に思ひを凝らし給ふた。卽ち上人が曉のねざめの宴坐は反省の懺悔の坐であり、現當のいのりの坐であつた。けれども、上人は自己の救濟を以て自ら滿足する獨善者流ではなかつた。上人の眼中にはその昔、天台の門流を酌んだ當初より、更に淨土の金池に望んで念佛の明月を翫び、而して嘉禎四年二月二十九日、七十六歲を一期として筑後の善導精舍に示寂せらるゝ迄、たゞ淨佛國土成就衆生の普賢行の躍進であつた。上人の宗敎は一向專修、結歸一行の宗敎であり、度世、救世界の宗敎であつたが更に最も救國の宗敎であつた。

この念佛法門を傳へ受けたれば、日本國の一切の人々を助け率らんがために、年七旬になりて、最後の化導と存じてワナナク〳〵注し置き候也こて、樣風流なく、只心に極樂を欣び、口に南無阿彌陀佛と申して、あしからん業を作らんをば、隨ひ給ふべからず。(念佛三心要集)

この一文を誦し來り誦し去る時、わが鎭西上人を以て精神日本の權化と崇むることは、如何なる人も——上人と宗敎

的立場を異にする人さへも――恐らく異存を申す人はあるまい。洵に上人は眞成の愛國者である。上人の生活は、日本を精神化する所謂念佛報國の生活であつた。上人の念佛三昧は日本を精神化せんがための聖業であつた。上人の宗教は日本を精神化し淨土化せんがための宗教であつた。吾等末徒は上人七百年の大遠忌を邀ふるに當りて、慧見無礙、導師の行に住し、最勝の道に住し、念佛報國の德を行じ給ひし上人を思ひ憶ふと同時に、上人の心を以て心とすべきことを誓はねばならぬ。是れ我等末徒が上人の恩德の萬一に酬ひ、報謝の誠を表はす所以である。